第２章

直江津の土蔵造建物

第２章　直江津の土蔵造建物

2-1　直江津の火災と土蔵造建物

2-1-1　火災との戦い

直江津は火災の多い町であった。『アルバム直江津』によると、かつて「直江津」と言えば「火事が多かったねェー」という言葉が真っ先に出るほどであったという（注１）。また長野克水氏は、「直江津と木端は、たてれば燃える」という悪口があったこと、直江津の火災保険料率が全国で最も高かった時期もあったことを述べられている（注２）。

直江津では、記録上最古の火災である明和４年（1767）の「焼きもち火事」から、昭和６年の「新町火事」までの間に、23 回もの大火があった（注３）。

直江津に大火が多かったことの一つの理由として、この街が烈しい季節風にさらされてきたことが指摘されている。長野氏によると直江津の大火は、「火災発生月から考えると、北西の季節風下でも発生しているが、直江津の人々が辰巳風と恐れる南東風、それもフェーン現象下で大火が発生していることが多い」という（注４）。

また、中戸賢亮『直江津こぼれ話』によると、直江津で大火が多かったのは木羽葺で石を乗せた屋根がほとんどであったために、一度火災が起こるとあっという間に燃え広がってしまったから（注５）、ともいう。木羽葺については、『頸城郡誌稿』（注６）に「榊原家高田城ニ入部後雪国瓦ノ便宜ニ非ルヲ以テ小羽板葺ニ改正セシト云伝ヘリ」という記事があり、江戸時代には寒さで割れたり、雪降ろしの際に滑り落ちたりする瓦よりもむしろ木羽葺を積極的に使用するむきがあったことが伺われる（これは高田城下についての記事であるが、同じ藩制下にあった直江津についてもあてはまるであろう）。しかし、直江津ではこの木羽葺が大火を頻発させる一因となってしまっていたらしい。

『北越商工便覧』（明治 22 年）をみると、直江津でも大きな商店建築では明治前期から瓦葺が採用されていたようであるが(第３章参照)、一般的にはひろまらなかったのであろう。明治 40 年（1907)、大火予防のために直江津警察署長が「屋上制限令」を出し、経済的に苦しい町民の「署長を殺せ」という声を耳にしながらも、強制的に瓦かトタン屋根に替えさせ、瓦の下には泥を敷かせたという。この結果、明治 41 年から昭和６年まで、23 年間無火災の記録が作られたのであった（注７）。

現在でも、直江津の町を散策すると先人達が火災と果敢に戦ってきたことを物語る遺産を見いだすことができる。その中の代表的なものがレンガ造の防火壁をもった洋風建築、高達回漕店事務所（中央３丁目、旧直江津銀行、明治 25 年頃）であろう。この防火壁は昭和６年の火災では隣家からの類焼を食い止める働きをみせたという。直江津ではところどころに古いレンガ塀を見かけるが、これらもまた防火に役立つことを期待されて建てられたものに違いない。かつてはレンガ造の銀行建築などもあったが、残念なことに今日では失われてしまっている。

図 2-1　高達回漕店事務所

2-1-2　土蔵造とは

直江津における防火建築として大きな役割を果たしてきたのは、レンガ造よりもむしろ土蔵造（蔵造ともいう）と称される種類の建築である。

土蔵造というのは、外部に木材を露出させないように土を塗り重ね、さらに漆喰にて表面を仕上げた工法をいう。元来は文庫や穀倉、寺院の経蔵（経典保管用の倉をいう）などに使用されてきたものであったが、防火性能が評価されて、江戸時代前期には諸々の建築に利用されるようになっていた。

江戸においては明暦大火（1657）の後に建立された本所回向院本堂（現存せず）が内陣のみを土蔵造としたものであったし、元禄 10 年（1697）には光源寺観音堂（駒込大観音、現存せず）も建立されている（図２）。江戸後期になると、地方においても土蔵造の寺院建築が造営されるようになり、新潟県村上市の浄念寺本堂（文化 15 年(1818)重要文化財)が著名である。

図 2-2　光源寺観音堂（『江戸名所図会』より）

明治以降も土蔵造の寺院建築は造営が続けられ、埼玉県秩父市では明治 11 年（1878）の大火の後に、土蔵造の本堂建築が普及した。寺院以外でも土蔵造は広まりをみせ、「店蔵（みせぐら)」と称される土蔵造の町家も各地で造営された。江戸では享保年間（1716～36）に吉宗の命によって市中建築で土蔵造が奨励されたのを契機として流行をみせたという[注8]。その後各地に伝播したが、中でも埼玉県川越市は、寛政４年(1792)の大沢家住宅(重要文化財)をはじめ、明治 26 年の大火を契機として建てられたものなど、数多くの土蔵造商家が残ることで著名である。

上記のように、土蔵造は江戸時代以来の伝統をもつ建築形式であり、また明治以降も各地でさかんに建設されてきたものである。ただし、今日では鉄筋コンクリート構造の普及などによって完全に廃れてしまっており、その数は減る一方となっている。そのため、文化財としての評価はむしろ高まりを見せているといってよいであろう。また、耐火建築である土蔵造建物の多くは、長期間の使用に耐えられる恒久的な建築として、手間と資金とをかけて造られている。よって、内部には豊かな装飾が施されている場合が多く、この点についても十分な評価が下されることが望ましい。

2-1-3　直江津の土蔵造建物

直江津には土蔵造による様々な建築があった。直江津は港町であったために、業務用倉庫としてたてられた土蔵があった。また各家庭においても倉庫として土蔵が建てられた。埼玉県川越市のように店蔵が建ち並ぶということは無かったが、土蔵造の店舗も若干はあったようである。中には直江津商業銀行（明治 35 年設立）のように洋風意匠をとりいれた土蔵造店舗もあった。さらに、神社では琴平神社本殿がかつては土蔵造であり、寺院においても土蔵造を採用したものが多く建てられた。

直江津の土蔵造建物について興味深いのは、「雨屋」の存在であろう。長野氏によると直江津の土蔵造建物は、横なぐりの季節風に伴う雨や雪によって壁のはげ落ちるのを防ぐために、白壁を外にみせているものはなく「雨屋」と呼ばれる板やトタン板でつくられた雨覆に包まれている、という。実際に直江津では下見板でお

おわれた土蔵をしばしば目にすることができる。このような「雨屋」は、直江津に限らず高田にも見られ、おそらくは上越市域以外においても風雪の激しい土地では広く見られるのではないかと思われるが、たとえ直江津独自のものではなくとも、建築と風土との関係において興味深いものである点においては変わりはない。

図 2-3　真行寺経蔵の「雨屋」

直江津の土蔵造の分類および分布についてはすでに『郷土新潟県の生活風土』のなかで長野氏が論じられているので本稿では省略するが、今回我々が調査を行なった土蔵造の寺院本堂および座敷蔵について以下に述べることにする。

2-1-4　土蔵造の本堂

現在、直江津には、以下の６寺院に明治末期から大正時代にかけて建立された土蔵造の本堂が残っていることを確認した。

竜泉寺　中央 2-1-11、曹洞宗
勝蓮寺　中央 2-4-1、浄土真宗本願寺派
聴信寺　中央 3-9-7、真宗大谷派
真行寺　中央 5-1-1、浄土真宗本願寺派
観音寺　中央 5-2-46、曹洞宗
林正寺　住吉町 1-1、真宗大谷派

今回の調査では、聴信寺・真行寺・観音寺・林正寺の４寺院について、聞き取りおよび実測調査を行なうことができた（各棟の詳細は次項参照）。

高田にも善念寺、光雲寺などの土蔵造本堂が散在しているが、直江津においては、より集中的に土蔵造の本堂がみられる。直江津はけっして広い町ではないが、その中に６棟もの土蔵造の本堂が集中して残っているのは、全国的に見ても異例のことである。直江津の寺院が、火災に対する並々ならぬ恐怖心を抱いていたことの表われとみなすことができよう。先に触れたように、直江津では一度火災が起ると、強風にあおられて大火に発展してしまうことがしばしばあった。直江津の土蔵造本堂群は、強風にさらされてきたこの町の風土が産みだした、興味深い文化財として高く評価することができる。

そして、現存する６棟の本堂は、同じ土蔵造という形式に属するものでありながら、外観をそれぞれ違えている。直江津の諸寺は、火災から資財を守りたいという共通する欲求を持ちながらも、各寺の個性を表現しようとした結果なのではないかと思われる。

外観ばかりではなく、本堂内部にほどこされた装飾彫刻もまたそれぞれ個性があり、魅力的である。土蔵造の本堂建築は、外部を土と白い漆喰で塗りこめてしまうために、通常の寺院建築の外観において最も装飾的な要素である軒廻りの組物が使用されていない。よってその外観は、一般的に地味でおとなしいものになりがちである。しかし、ひとたび堂内へ入ると彫刻などの豊かな装飾がみられる場合が多い。直江津の土蔵造本堂にも内部装飾に優れたものがある。勝蓮寺（中央２丁目）の欄間彫刻は直江津出身の彫物師、高橋富吉（二代）の作といい、注目すべきものである。また、聴信寺（中央３丁目）の外陣の蟇股には個性的な造形のものが使用されており、関わった大工の並々ならぬこだわりが感じられた。

土蔵造の本堂建築は、直江津の諸寺、およびそれぞれの檀徒であった直江津の町民たちのもっていた高い矜恃心、建築造形に関する高い意識を今に伝えている。そして、その意識に応えられるだけの技術をもった職人たちがこの町に

いたことを教えてくれるのである。

2-1-5　「座敷蔵」について

「座敷蔵」とは、長野氏によると、「入口がたたみ敷の部屋に面しており、居住に用いられている土蔵」であり、「二階は、普通の土蔵と同じ利用形態であるが、一階はたたみが敷かれ、仏壇やタンスが置いてあり人が寝起きしている場合が多い」という。規模については「最も多いのが 1.5 間×２間であり、小さいものは、1.5 間×1.5 間があった。大きいもので、1.5 間×2.5 間、２間×２間どまり」であり、また、比較的部屋数の少ない家に多く、敷地面積 21 坪未満の家の場合が多いという。

同氏は、座敷蔵の成立の要因として、たびたび火災にあった直江津では、火災後の復興において家よりもまず蔵を建てる傾向があったことを挙げている。土蔵に仮住まいをしながら仕事をして資金を貯え、土蔵の周りに居室等を増築していった結果、座敷蔵が成立したのではないかという。

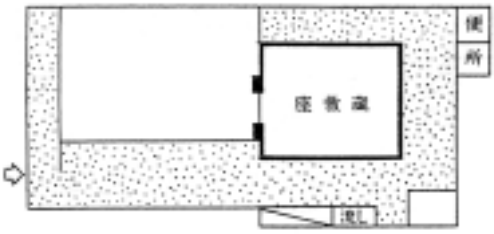

図 2-4　座敷蔵のある家の間取り

（『郷土新潟県の生活風土』P100 より転載）

今回の調査では、４軒の町屋に今なお「座敷蔵」と称されているものが残されていることを確認することができた(「上越市歴史的建造物リスト」参照)。ただし、その内の一軒は元々倉庫として使用していたものを居室に改造したものであった。上記の定義に則した「座敷蔵」は、わずか中央２丁目および中央４丁目の２棟のみである。

直江津の人々の間では「座敷蔵」というものがあったという記憶は、今なお健在なようではあるが、その実例は着実に数を減らしている。「座敷蔵」は、直江津の土蔵造建築の中で最も地域色の強いものであるだけに今後、調査および保存措置が実施されることが望ましく思われる。

2-1-6　おわりに

直江津の「火災の街」としての側面は、すでに過去のものとなったといってよいだろう。しかし、火災との戦いがこの街の表情に個性を与えてきたのであり、今でも辛うじてその痕跡はとどめられている。全国の都市が没個性なものに変貌しつつある今日において、直江津に残された土蔵造建築はこの街の個性を認識するための一つの契機を与えてくれるのではないだろうか。

注

注１：『アルバム直江津』北越出版、平成 11 年

注２：長野克水「直江津における「座敷蔵」」『郷土新潟県の生活風土』新潟県社会科教育研究会、昭和 59 年

注３：前掲『アルバム直江津』

注４：前掲「直江津における「座敷蔵」」

注５：前掲『アルバム直江津』

注６：『訂正 越後頸城郡誌稿』越後頸城郡誌稿刊行会編、豊島書房版

注７：前掲『アルバム直江津』

注８：上田篤・土屋敦夫編『町家　共同研究』鹿島出版会、昭和 50 年

2-2　土蔵造寺院実測

2-2-1　聴信寺本堂

中央３丁目に位置する聴信寺は、浄土真宗大谷派の寺院である。『直江津町史』（白金賢瑞著、直江津町役場、昭和 29 年）によると、当寺は明治４年、同 31 年、同 39 年、同 41 年の火災に類焼している。現存本堂の建立年は不詳であるが、明治 41 年の焼失の後に再建されたものとみられる。すなわち、明治末年から大正年間にかけて建立されたものであろう。

戦後に数回の部分的な修理が加えられている。仏壇下に「昭和四十二年三月完了」という修理銘があり、この頃に仏壇を塗り直す修理があったと知られる。また本堂内（正面入口上部）に貼付けられた木札（御棟札）より昭和 56 年８月には、先代にあたる 23 世住職輝徳による向拝部分の修理が竣工したことが知られる（設計施工霜越建設（株）、棟梁小島貞雄）。さらに住職からの聞き取りによると、十数年前に屋根の木端が腐食したために修理を行なったという。この修理に際して小屋組材の一部が新材に交換されている。

間口 11m 弱、奥行 18m 強の奥行が長い平面を有する。屋根は切妻造、妻入、桟瓦葺。正面向拝１間、唐破風造、銅板葺、格天井。この向拝は昭和 56 年に改造される以前は瓦葺で「三角屋根」（入母屋造のことか）であったという。

平面構成は浄土真宗本堂の特徴を示す。すなわち、正面向拝より中に入ったところが広縁で、その奥が幅６間、奥行４間の外陣となる。外陣は柱列によって前後に区画され、手前側の奥行２間半分が参詣の間、奥の 1.5 間分が矢来内となる。外陣の奥には中央に幅３間の内陣、その左右にそれぞれ幅１間半の余間がある。内陣中央奥寄りに来迎壁がたてられ、その前面に須弥壇・宮殿が据えられる。来迎壁背後には引違戸が入れられており（調査時にははずされていた）、堂の最背面にあたる後間へ出入りできるようになっている。後間は物置として使用されており、その上階にある収納のための空間へ上がるための階段が設けられている。

柱は総角柱で、来迎柱のみ円柱である。広縁は板敷（上り口の部分にコンクリートのたたきがある）、格天井。外陣は畳敷（48 帖、うち参詣の間 30 帖、矢来内 18 帖）、格天井。内陣は外陣よりも床が一段高くなり、板敷、小組格天井。左右余間は内陣と同床高で、板敷（一部置畳あり）、格天井。組物・中備は外陣・内陣・余間ともに、出組・実肘木・拳鼻入、蟇股。建具としては内・外陣境に双折金障子、余間・外陣境に引違金障子が入る。内・外陣境の欄間に龍の彫刻があり、背面に「彫龍工　貞秀」という刻銘がある。外陣・余間境の欄間は筬欄間（各々２個の円形装飾彫刻が施される）である。なお、内陣中央の宮殿内に本尊として阿弥陀如来立像が安置され、向って右側の脇壇に七高僧画像、聖徳太子画像などの掛幅、左側には歴代住職の法名軸などが掛けられている。

側面（向って左）には広縁・外陣・後間にそれぞれ開き戸が設けられているが、それぞれ漆喰による意匠を違えており、工匠の細やかな配慮が伺われる。また、向拝に亀の彫刻をあしらった懸魚があるが、水と関わりのある亀は火災除けの意味を込めて建築意匠に取り上げられることのあるものである。

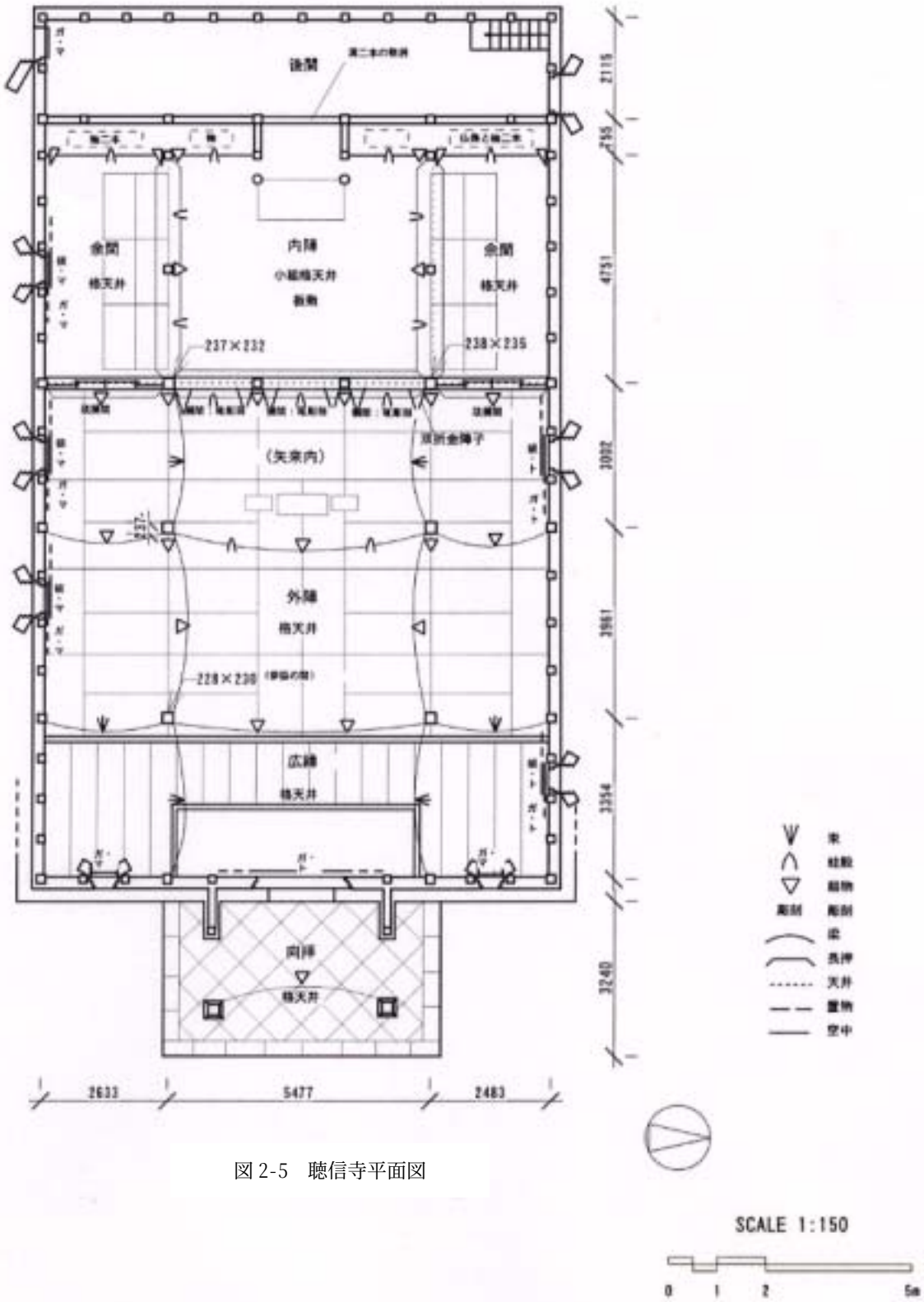
後間
内陣
小組格天井
板敷
余間
格天井
余間
格天井
237×232
238×235
(矢来内)
外陣
格天井
228×230
広縁
格天井
向拝
格天井
2633
5477
2483
2115
755
4751
3022
3661
3354
3240
SCALE 1:150
0
1
2
5m

図 2-5　聴信寺平面図

図 2-6　外観（正面）

図 2-7　外観（背面・側面）

図 2-8　内部（外陣より内陣を見込む）

図 2-9　内部（外陣より広縁を見込む）

図 2-10　内陣の荘厳

図 2-11　内外陣境の欄間

図 2-12　外陣の架構

図 2-13　向拝の懸魚（亀）

2-2-2 真行寺本堂

中央５丁目の真行寺は浄土真宗本願寺派に属する。当寺は慶長年中（1596～1615）に信州高井郡から春日山へ移転、さらに塩屋新田に移転した後、寛文２年（1662）に当時砂山村分であった 40 間四面の畑(すなわち現在地）を買受けて、同８年に屋敷替をしたという。今町（直江津の旧名）のはずれにあたり、「畑中の真行寺」と称されていたそうである。

本堂は、寺伝では寛文８年（1668）の建立という。ただし当初は土蔵造ではなく、茅葺の通常の本堂であった。真行寺には明治 34 年（1901）12 月付の銅版画の境内図が伝わっている。この図によると本堂はもともとは入母屋造・妻入で、間口５間、側面に下屋のついた堂であったことが知られる。また、茅葺であった頃の古写真も伝わっている(『アルバム直江津』)。明治 38 年 12 月、防火のために本堂が土蔵造へと改める工事が落成した。建設費は 3540 円 44 銭 6 厘であったという。同寺には「奉加帳」（版本）が残されている。このときの工事で、茅葺は瓦葺に改められ、外陣と広縁の境の筋に立っていた柱４本が撤去されている。なお、窓の内側に取り付けられた防火用の引戸裏面には、「明治参拾八年／拾貳本之内／施主 片田典作」という明治改造時の寄進銘（墨書）があるが、住職の話によると、「片田典作」は安国寺の棟梁で、直江津の屋台を造営したことのある人物であるという。ただし当本堂の明治改造とこの人物の関係は未詳である。柱・梁については明治改造以前の部材が含まれているようであるが、それ以外の材についてはどの程度旧材が含まれているか未詳である。外陣の天井に近い方の組物･蟇股も古いものである可能性があるが、今後の調査に判断を委ねたい。

大正 10 年（1921）には、本堂の内・外陣の改修･荘厳がおこなわれた(建設費 5969 円)。すなわち、内陣の金箔の貼替、前机の購入（京都から取り寄せたという）などが行われた。また、昭和 49 年、本堂内陣の「御洗濯」があり、再度金箔の貼替などがおこなわれている（仏壇下にこの修理の際の墨書銘あり)。これは親鸞上人七百回忌に際しての門主来訪に備えた修復であったという。さらに、平成５年には屋根が瓦葺から銅板葺に改められ、外陣格天井の新調も行われた。

本堂は間口 17.4m、奥行 18.3m で、東を正面としている。屋根は寄棟造、妻入、銅板葺（旧桟瓦葺)。正面向拝１間、唐破風造、銅板葺。正面向拝より入ったところが広縁であるが、その左右両端に物置および上階への階段が設けられている(上階は収納となっている)。広縁の奥が外陣で、柱列により前後に区画され、参詣の間（手前)・矢来内（奥）となる。外陣の奥には中央に内陣がとられ、その左右それぞれに余間と脇間がつく。堂の最背面には後間がとられており、左右脇間もしくは、内陣後戸を通って出入りすることができる。後間の左右両端には上階（収納）への階段があり、背面中央には堂外へ通ずる引戸が設けられている。ほぼ浄土真宗本堂の形式に従うが､余間の左右の入側１間通りに板敷の室(脇間）がとられているのは比較的大きな浄土真宗本堂の特徴であり、また余間の床が内陣よりも低く、外陣と同じとなっている点は特異である。

柱は内陣の 14 本および外陣の４本が円柱で、その他は角柱とする。広縁は板敷（現在は畳を置く、一部コンクリートのたたき)、化粧屋根裏。外陣は畳敷（72 帖、ただし現在は畳の上に絨毯を敷き椅子座にて法会を行えるようにしてある)、格天井（新しい)。外陣の向かって右奥の５帖分は床が一段高い板敷となるが最近の改造によるもの。外陣架構における蟇股には一部に独特の絵様・繰形が用いられており、興味深いものである。内陣は外陣より一段床が高く、板敷（左右各２枚ずつ

置畳あり)、格天井（古い)。仏壇背後に後門がとられ、後間へ通ずる。左右余間は外陣と同床高で、畳敷（各８帖)、格天井（内陣と同様)。建具としては内・外陣境に双折金障子、余間･外陣境および余間･脇間境に引違襖戸、脇間･外陣境に彩画のある引違杉戸を入れる。なお、内陣中央厨子には本尊の阿弥陀如来が安置される。

真行寺本堂は、土蔵造という特色を有するのみならず、明治改造以前（寺伝では寛文期のものとする）の本堂の部材を一部にとどめている点、明治改造時における質の高い仕事が認められる点をなども考慮すると、文化財として高く評価されてしかるべき建築といえるだろう。

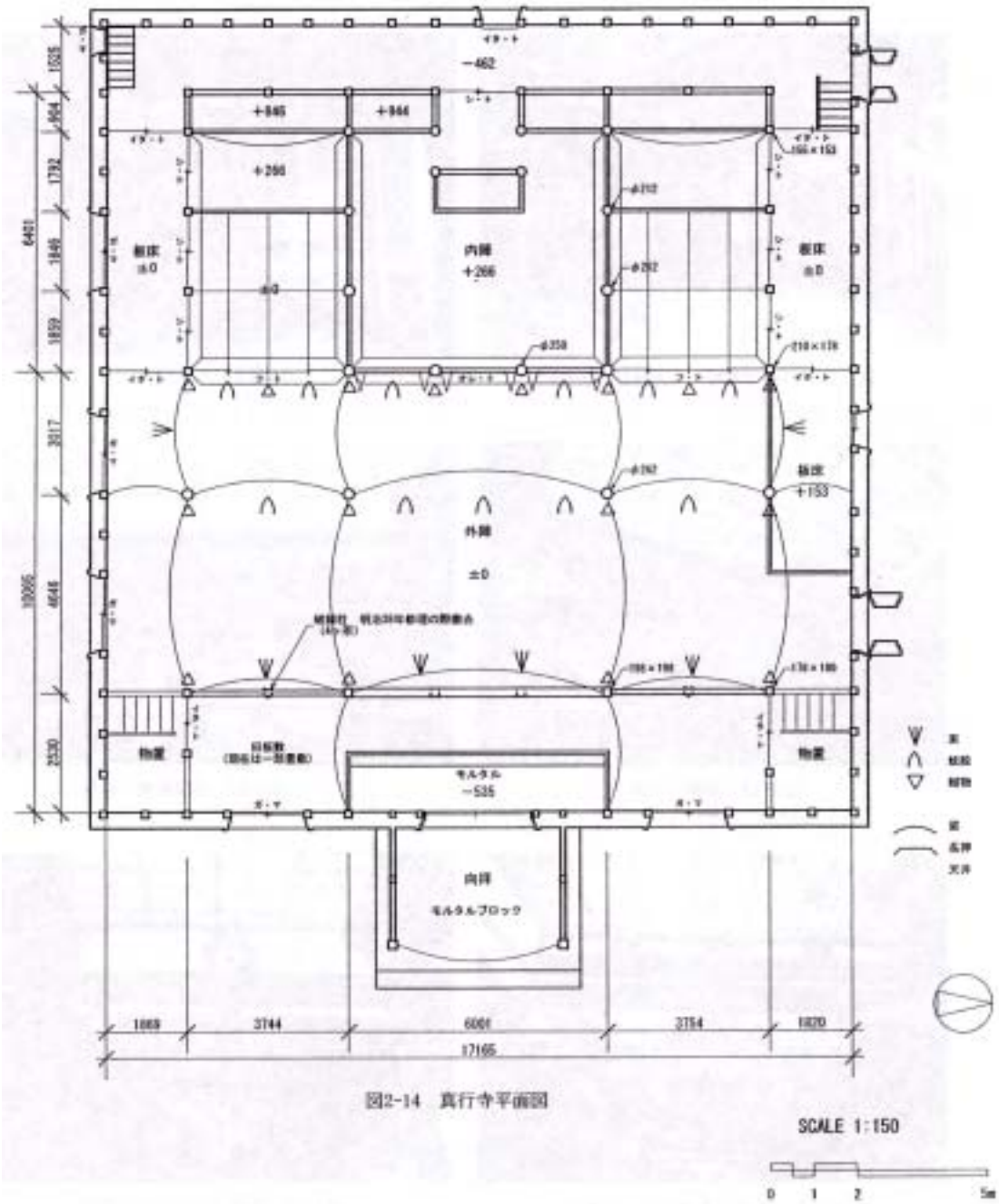

図2-14　真行寺平面図

図 2-15　外観（正面）

図 2-16　外観（側面）

図 2-17　内部（外陣より内陣を見込む）

図 2-18　左余間

図 2-19　外陣の架構

図 2-20　外陣虹梁の絵様

図 2-21　外陣（参詣の間）の架構

図 2-22　外陣（矢来内）の架構

2-2-3 林正寺本堂

林正寺は浄土真宗大谷派に属し、本尊は阿弥陀如来像である。

本堂は明治 39 年（1906）の 7 月 11 日未明に焼失した後、同年 10 月から資金が集められ、大正 4 年 4 月 5 日に起工、同年 11 月 1 日、2 日に上棟式が行われた。棟梁は相馬幸吉、彫刻は中澤幸作の手による。ただし、欄間に嵌め込まれた金箔貼りの彫刻は既製品を購入したものという。本堂の再建は急ピッチで進められ、土打は船会社の水夫 80 人を含む 200 人以上の手によってわずか 5 時間で行われ、外壁は海鮮問屋の人夫により 1 日で塗り上げられたという。御遠忌にあたる昭和 44 年には素木であった内陣柱が金箔、金紙などで装飾された。昭和 50 年頃、屋根の庇が落下したため下地に金網が入れられた。

本堂は木造、土蔵造である。正面約 15m、奥行約 16.6m の正方形に近い平面をもつ。屋根は入母屋造、桟瓦葺。正面向拝は唐破風造、銅板葺。

内部は内陣、左右の余間、外陣、参詣の間からなる。中央の間口 3 間、奥行 3 間半が内陣で、中央奥よりに独立した須弥壇が置かれる。須弥壇には明治 2 年の墨書銘が見られ、旧本堂から持ち出されたものと思われる。また、来迎壁の裏には白衣観音が描かれている（「渓堂」の銘）。須弥壇の左右の 1 間後方に親鸞上人と蓮如上人の画像が掛けられる。

内陣の左右には正面 2 間、奥行 3 間半の余間がある。南の余間には南無阿弥陀仏の宝号が掛けられる。北の余間には奥行半間の床が設けられ、聖徳太子画像と彫像が安置されている。余間は、仏壇側の半間は板敷、他は畳敷。

内陣前には奥行 1 間の外陣と奥行 2 間半の参詣の間が続く。参詣の間には奥行 2 間半の大虹梁が渡され、柱を省略した大空間が造られている。外陣・参詣の間は板敷の上に畳を敷詰めている。創建当初の床板は昭和 28 年に張り替えられた。正面側 1 間通は広縁で、板敷となる。内陣・余間の外側にはコの字型に通路が設けられている。

天井はすべて格天井。組物は、柱上と中備共に出組（実肘木・拳鼻入）が用いられている。参詣の間の虹梁上に束、蟇股がのる。向拝の虹梁上、内部の虹梁・蟇股に彫刻が見られる。

史料 1　北西西戸墨書

大正四年四月六日起工
六月十六日上棟
十一月一日二日
遷佛式及供養会
執行

史料 2　仏壇床下墨書

越後国
中頸城郡
明治貳壱子年
潟町村
六月辰艮
佛壇師
永原又十郎
細工

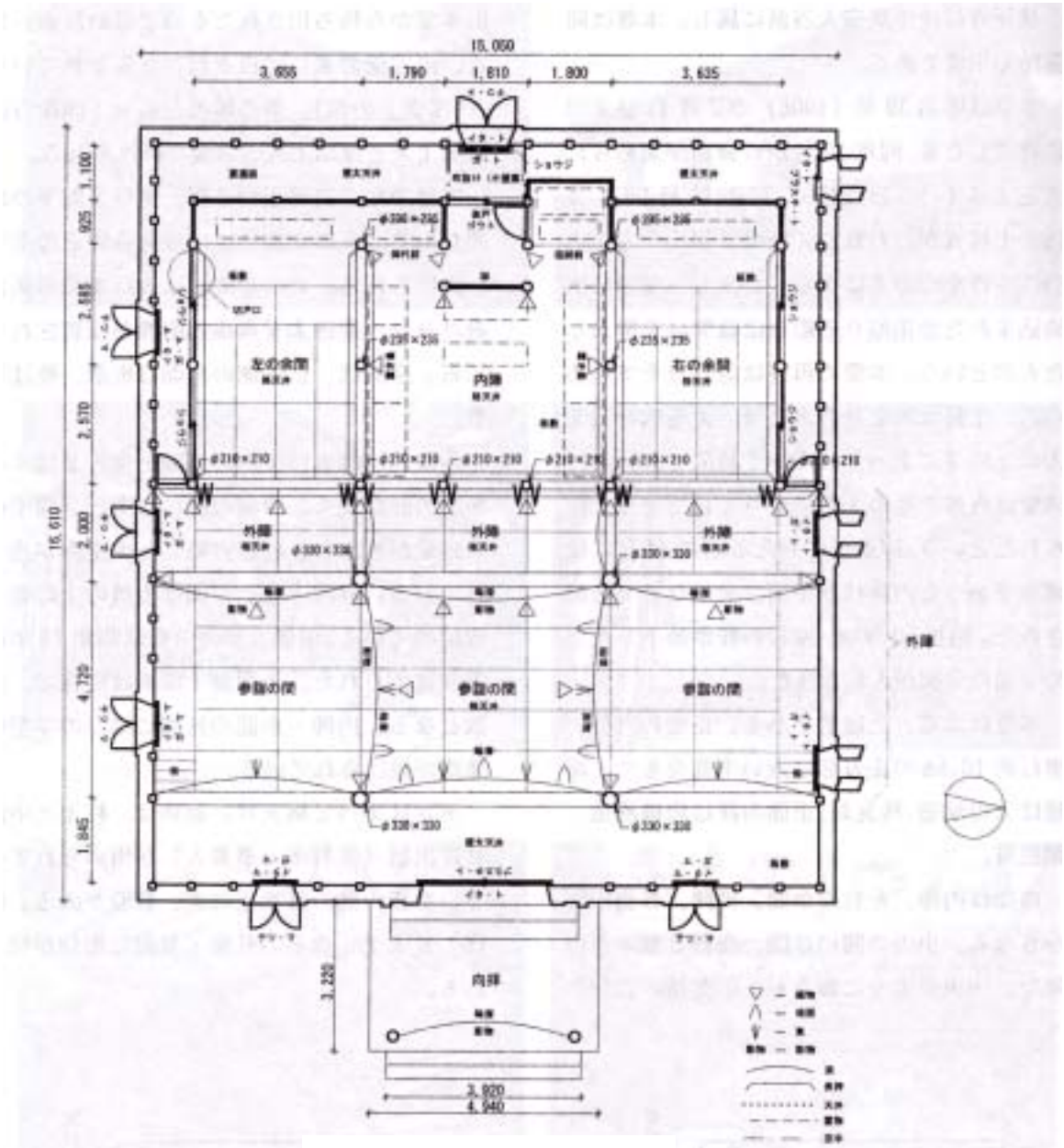

図 2-23　林正寺平面図

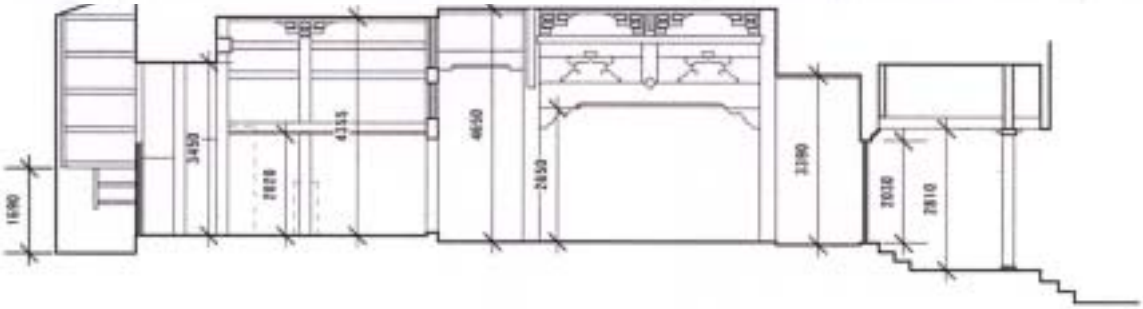

図 2-24　林正寺桁行略側面図

SCALE 1:150

0　1　2　5m

図 2-25　外観（正面）

図 2-26　外観（背面）

図 2-27　向拝懸魚

図 2-28　内部（参詣の間より内陣をみる）

図 2-29　参詣の間

図 2-30　内陣仏壇

図 2-31　左余間

2-2-4　観音寺本堂

直江津の観音寺は、寺伝によれば、康平年間（1058～65）八幡太郎義家と父頼義が守護仏である観世音菩薩像を安置し、義経が奥州下向の際には胸掛の観音を納めた地という。文亀元年（1501）（一説に天正元年（1573））に春元仁立禅師が、それまで真言宗であった寺院を月喬和尚から譲り受けて、曹洞宗慈眼山観音寺を開いた。

その後の沿革については詳らかにしえないが、宝暦７年（1757）地震により堂宇が傾斜したとの記録が残る。

明治 31 年（1898）６月４日の夜、直江津の大火により本堂は焼失した。明治 32 年（1899）12 月、隣の龍泉寺から譲り受けた三室に改造を加えて仮客殿とし、仏像を安置していたが、大正 12 年（1923）から昭和３年（1928）にかけて現在の本堂が再建された。昭和 48 年には本堂の土台高が上げられ、壁が修理された。平成 10 年には引戸がガラスサッシに改められた。

現在の堂宇は木造２階建、土蔵造の建築である。火災に対する警戒は外壁ばかりではなく、内部の造作にも見られる。内陣中央の仏壇には本尊を真下に降ろす仕掛けが造られており、火災の際にここから本尊を出して後の扉から運び出せるようになっている。

本堂は正面約 13.5m、奥行約 14m のほぼ正方形の平面である。屋根は入母屋造、桟瓦葺。正面の向拝は唐破風造、銅板葺、格天井で、正面に龍の鏝絵がつけられる。この鏝絵の置物師は高橋丈次郎と高野正一、図案師は中澤幸作である（史料４）。

本堂の平面は内陣、位牌堂、開山堂、方丈、大間、八尺間からなる。一階奥の中央の正面３間、奥行３間半が内陣。内陣の南側の正面２間、奥行２間半が開山堂と位牌堂である。Ｌ字型の壇の西側が開山堂、南側が位牌堂となる。内陣北側の正面３間、奥行３間半が方丈。内陣は左右の位牌堂、方丈より１間分前に出ている。大間は正面７間で、内陣前は奥行２間半、方丈と位牌堂前は奥行３間半の凹字型平面となる。八尺間は表側の奥行１間通である。

内部の柱は、側柱と開山堂・方丈の仏壇脇の柱、八尺間と大間の境が角柱、他の柱は円柱である。

内陣は創建当初は畳敷、平成４年に板敷となった。位牌堂・開山堂も創建当初は畳敷だったが、平成４年に板敷となり、仏壇には格狭間が付けられた。方丈は畳敷、住職の居室として利用されていた。現在は、仕切の襖がはずされている。奥に聖徳太子像が安置されている（昭和２年に曽我家から寄進）。

内陣・位牌堂・開山堂・方丈は格天井で、創建当初は素木の格縁で天井板に丸に笹の紋が描かれたフェルト地が張られていたが、平成４年に格縁に漆を塗り、格間を花が描かれた既成の天井板に変更した。

大間は畳敷で、北の壁際には座禅を組むための床が置かれている。大間は梁を境に格天井の部分と、根太天井・棹縁天井の部分に分けられる。２階は八尺間と大間の根太天井の上のみにとられ、板敷で物置になっている。

内陣と大間境の欄間や仏壇脇の柱に彫刻が見られるが、直江津の他の土蔵造本堂に比べると装飾は控えめで、宗派の特徴を表している。これらの彫刻の制作には中澤幸作、伊藤典作、高橋丈次郎、高野正一らが関与している（史料３）。

なお本堂再建以前に仏像が安置されていた仮客殿は、現在庫裏・台所として使用されている。昭和 48 年に修理され内装などは改められているが、柱には改造の痕跡が多く残る。

また、本堂前の庭は昭和 11 年に整備されたもので石橋の造営もこの時期にかかる。入口の仁王像は昭和３、４年頃、五智に居住の滝川美堂が彫ったものという。

史料3　内外陣境虹梁上欄間裏墨書

昭和戊辰既紀念
発願人
佐藤作造
世話人
青木善造
當山廿四世本宗代

（北側）

観音寺
世話人　四代青木善造
五代佐藤奥八
彫刻人　藤原規義
中澤幸作事

（南側）

昭和三年即位紀念
発願人
佐藤作造
彫刻師
中澤幸作
伊藤典作
當山廿四世本宗代

（中央間）

史料4　鏝絵横木札墨書

昭和戊辰御即位紀念寄附者
置物師　高野丈次郎
高野正一
図案師　中澤幸作

史料5　本尊脇柱付き彫刻裏墨書

昭和三年御即位紀念　寄付者　彫刻師　中澤幸作
直江津町

（北側）

昭和三年御即位紀念　寄付者　彫刻師　中澤幸作
直江津町

（南側）

史料6　内外陣境柱寄附者銘
（北側より記す）

東京市
本郷区神明町
水嶋利助

信州
南佐久郡高野町
水嶋善平

直江津町
加島楼
土井ソト

直江津町
新坂井町
小林常五郎

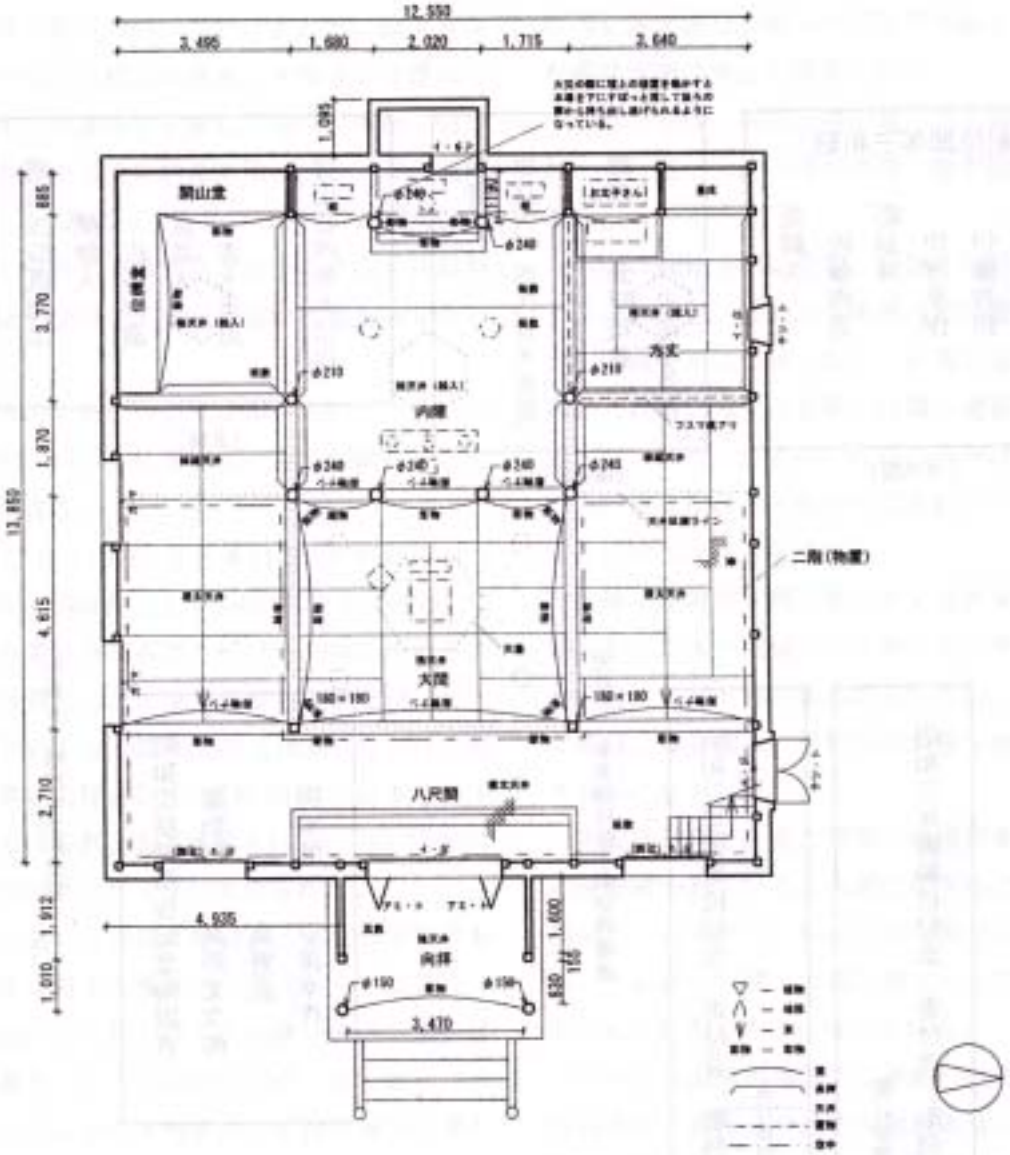

図 2-32　観音寺平面図

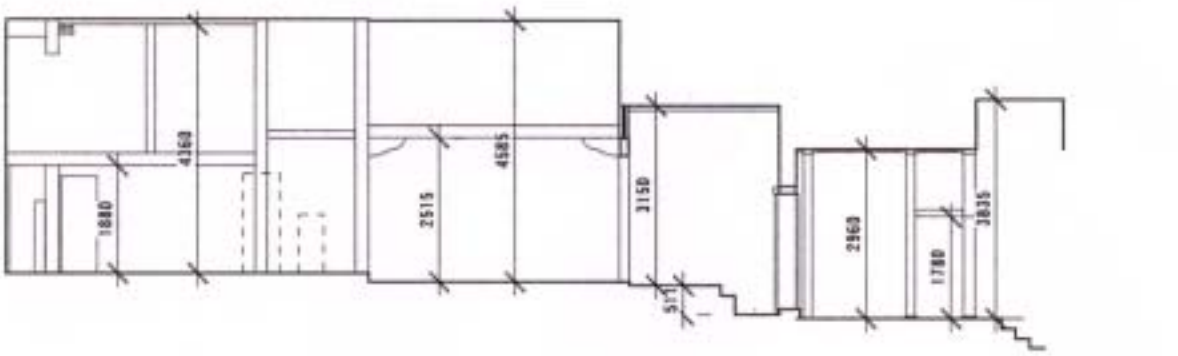

図 2-33　観音寺桁行略側面図

SCALE 1:150

0　1　2　5m

図 2-34　外観（正面）

図 2-35　外観（側面）

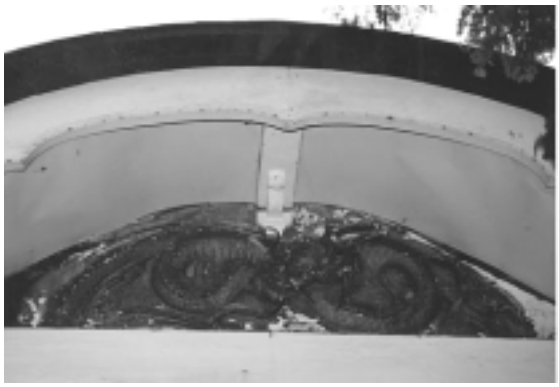

図 2-36　向拝鏝絵

図 2-37　内部

図 2-38　内部（大間から位牌堂をみる）

図 2-39　内外陣境欄間

図 2-40　内部（大間より方丈をみる）